

文部科学省事業

令和3年度 WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業

令和元年度指定 WWL コンソーシアム構築支援事業 研究報告書

第3年次

令和4年3月

国立大学法人金沢大学

金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校

目 次

第 1 章	令和 3 年度 WWL コンソーシアム構築支援事業の取組（概要）	2
第 2 章	令和 3 年度 WWL コンソーシアム構築支援事業拠点校・連携校における取組	9
	金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校における取組	9
	石川県立金沢泉丘高等学校における取組	17
	石川県立金沢二水高等学校における取組	19
	石川県立小松高等学校における取組	20
	石川県立七尾高等学校における取組	21
	富山県立高岡高等学校における取組	23
	福井県立高志高等学校における取組	24

第1章 令和3年度WWLコンソーシアム構築支援事業の取組（概要）

1 事業の実施期間

令和3年4月1日（契約締結日）～令和4年3月31日

2 事業拠点校名

学校名 金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校

学校長名 中澤 宏一

3 構想名 持続可能な世界を実現し、Society5.0を牽引するグローバル・リーダーの育成

4 構想の概要

本構想は、北陸圏域の高等学校、海外の高等学校、関連する機関により「北陸ALネットワーク」を形成し、組織的・継続的に“持続可能な世界を実現し、Society5.0を牽引するグローバル・リーダー”を育成するものである。

拠点校において実施してきたスーパーグローバルハイスクール事業（以下：SGH）の課題探究型課程をベースに、国内外の連携校等における取組や各校が立地する地域の異なる経済・文化・歴史等の社会的背景も含めた多様な視点、協働機関による専門的視点からの指導等を取り入れることにより、教育カリキュラムを深化させる。さらに、高校生の段階から金沢大学が有する海外ネットワーク等も活用した国際性と、アドバンスト・プレイスメント（以下：AP）による高い知識を身に付けさせる取組を加え、社会が抱える複雑な課題に立ち向かう“新たなグローバル・リーダー”育成モデルを確立し、広く全国へと発信する。

5 教育課程の特例の活用の有無

無し

6 管理機関の取組・支援実績

（1）実施日程

業務項目			実施期間（令和3年4月1日 ～ 令和4年3月31日）											
			4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
ネットワークの 管理運営	運営会議等の設置・ネットワーク運営				各連携校との協議					会議実施 ○	各連携校との協議		会議実施 ○	
	運営指導委員会の設置・評価		←						委員の選出・委任				評価 ○	
	国内外のネットワーク強化		←				連携校以外の高校との連携開拓						→	
アドバンスト・ プレイスメント （AP）の実施	新たなAPの開発		高大接続にかかるAPの検討				学士課程科目等履修生の出願資格緩和				→			
	既存事業を活用した APの実施	グローバル・ サイエンス・ キャンパス	募集		一次選抜 ○		第1ステージ（1年目）		二次選抜		第2ステージ（2年目）		→	
			第2ステージ（2年目）				三次選抜 ○		第3ステージ（2年目）		→			
			日本数学 A-lympiad						←→ 募集	開催 ○	結果 発表 ○			表彰式 ○

（2）実績の説明

2021年度の構想計画に係る取組の実績

（2）ー1 ネットワークの管理運営

①北陸ALネットワーク運営

本事業の実施にあたり、令和3年度は、令和2年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、対面での会議の開催や海外渡航等の移動に制限が生じていたが、令和2年度ま

で構築した国内外とのネットワークを基盤とし、Zoom 等のオンラインシステムを活用して管理機関、拠点校、連携校、各県教育委員会、海外機関等との迅速な情報共有を図った。さらに、新たな情報共有・情報発信の場として、令和2年度に構築したプラットフォームを活用し、オンライン上で研究成果物の掲載による情報発信等を開始する。また、管理機関の長を議長とする「北陸 AL ネットワーク運営会議」を令和3年6月に開催し、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を踏まえた拠点校及び各連携校の実施計画等、事業全体の進捗状況について確認した。さらに、令和4年3月にも本運営会議を開催し、令和3年度を通じた事業全体に関する進捗管理や次年度の事業運営の在り方について確認した。さらに、令和2年度の課題を踏まえ、教員の情報共有や事業の具体的な方策の検討をより機動的に行うことができるように、拠点校と連携校における事業の具体的な企画・立案を担う小委員会を立ち上げ、令和3年12月に本小委員会を開催し、令和4年度の活動に向けた方策等について意見交換を行った。（【実施体制の整備】a,b,c，【AL ネットワークの形成】a,b,g）

また、管理機関では、国際交流ネットワークや高大接続プログラムの拡大に加え、社会共創活動に係る北陸地域の企業や経済団体との連携の拡大を図っており、これらのネットワークの拡大による AL ネットワークの基盤強化を積極的に進めている。また、拠点校及び連携校の生徒が、管理機関の留学生・教員・卒業生、企業・諸団体等との交流を通じ、プログラム修了後に国際的な分野を学ぶ国内外の大学への進学や海外留学の意欲促進に繋がったと考える。（【AL ネットワークの形成】c）

②運営指導委員会の設置・評価

運営指導委員会では、前年度に引き続き、本事業における学びの在り方等について、報告書に基づき、専門的見地から検討し、指導・助言をいただいた。（【実施体制の整備】d）

③カリキュラムアドバイザーの配置

管理機関が「カリキュラム・アドバイザー」を2名配置し、カリキュラム・アドバイザーを中心に拠点校教員と協働し、令和元年度に連携体制を構築したシンガポールのナショナル・ジュニアカレッジ（NJC）と、令和2年度に引き続き Slack を活用した共同のワークスペースを運用するとともに、Zoom 等を活用して、協働プログラム開発に係る遠隔会議を定期的に行った。また、NJC 主催のイベントへの参加の提案を受け、拠点校の生徒が参加する等、更なる連携も進んでいる。（【財政等支援】a,b，【AL ネットワークの形成】d）

④国内外のネットワーク強化

令和元年度に構築した関西の WWL コンソーシアム構築支援事業拠点である関西学院大学との連携に加え、探究成果発表会等を通じ、石川県立大聖寺高等学校、長野県上田高等学校、長野県長野高等学校、宮城県仙台二華高等学校、福井県立若狭高等学校、獨協埼玉高等学校、北海学園札幌高等学校等とも連携体制を構築した。また、探究成果発表会等におけるアドバイザーとして、金沢市役所、日本政策金融公庫、筑波大学、北陸大学等に所属する専門家が参画する体制を構築し、民間企業や、地方公共団体、教育機関等とのネットワークを強化した。さらに、令和2年度にオンライン上に構築したプラットフォームにおいて、課題研究等の成果物を掲載し、情報発信を開始する。（【研究開発・実践】b）

（2）－5 アドバンストプレイスメント（AP）の実施

①新たな AP の開発

管理機関である金沢大学において、令和3年度から学域等への科目等履修生の出願資格に「高等学校等に在学している者」を加え、高校生が大学教育を履修するための制度を導入し、より高度な学びを希望する高校生が大学において学習できる環境を整備した。令和3年10月には、研究開発拠点校の生徒5名が、科目等履修生として金沢大学に入学し、1科目を履修した。（【研究開発・実践】g,h）

②既存事業を活用した AP の実施

管理機関である金沢大学における既存事業を活用した AP として、「日本数学 A-lympiad」や「グローバルサイエンスキャンパス」（以下 GSC）を実施しており、令和 3 年度「日本数学 A-lympiad」では拠点校から 32 名、連携校から 46 名が参加し、全体では、17 都道府県から 86 チーム、327 名が参加している。令和 3 年度は拠点校の参加チームが優秀な成績を収めた。「GSC」では、拠点校から 5 名、連携校から 28 名が参加しているほか、北陸圏のみならず、神奈川県、岐阜県、新潟県、長野県等の高校生も参加している。

これらの活動を通して、学生は自己の教養を高め、思考力と判断力を養成している。（【研究開発・実践】h）

（２）－ ７ 財政等支援

①人的支援

人的支援として、管理機関が大学であることの強みを活かし、連携校への留学生の派遣や Zoom 等を活用したオンラインでの交流を行った。ポスター形式やワークショップ形式でのプレゼンテーションやディスカッションを英語で行うことにより、実践的な英語力の養成を図ることが可能となった。

例えば、SGH 事業から継続して、管理機関から連携校である金沢泉丘高等学校へ留学生の派遣を行っており、令和 3 年度は Zoom 等を活用し英語によるディスカッションを行った。また、令和 2 年度に引き続き、石川県立小松高等学校における交流会において留学生を派遣し、高校生から留学生へのインタビューやディスカッションをしながら、文化交流の機会となるとともに、生徒自身の将来や社会の未来について国際的な視野で考える機会となった。

さらに、連携校である石川県立七尾高等学校へ、ジェンダーや生物多様性に造詣の深い教員を派遣し、探究活動の展開を推進した。（【財政等支援】a,b）

②財政的支援

管理機関である金沢大学の自主財源等により、AP として日本数学 A-lympiad や GSC を実施した。また、本事業の永続的な実施に向け、昨年度に引き続き、拠点校において、グローバル・リーダー育成基金を運用している。（【財政等支援】b,c）

7 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目		実施期間（令和3年4月1日 ～ 令和4年3月31日）											
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
グローバルな社会課題カリキュラム開発	SDGsを題材とした教科指導 地域課題研究・グローバル課題研究の展開					地域課題研究			現地学習 ○	レポート提出 ○	探究発表会 ○		
						グローバル課題研究						レポート提出 ○	
	新たな科目の開発・実施					「国際教養 基礎」の開発・実施							
国内外の高校とのネットワークによる活動	連携校等とのSDGs協働研究				NJCとの協働研究や他校との連携								
海外研修/アジア高校生架け橋プロジェクトにおける海外高校生受入	海外研修			新型コロナウイルス感染症拡大のため中止：オンラインを活用した交流等を実施									
	架け橋プロジェクト受入												
高校生国際会議の開催	留学生とのグローバル・ディスカッション				グローバル・ディスカッションの実施 ○								
	国際会議の開催				高校生国際会議開催準備 ○	高校生国際会議開催							次年度高校生国際会議開催検討

(2) 実績の説明

2021年度の構想計画に係る取組の実績

(2) - 2 グローバルな社会課題研究のカリキュラム

①SDGsを題材とした教科指導 地域課題研究（1年生）・グローバル課題研究（2年生）の展開

管理機関に配置したカリキュラム・アドバイザーと拠点校教員が協働し、地域課題研究に係るプログラム及びグローバル課題研究に係るプログラム等を実施するとともに、これまでの経験と学びを振り返り、将来像を設計する「グローバル・キャリアパス」（3年生）の開発を行った。

地域課題研究では、以前のグループ研究から個人研究中心に切り替えた。グローバル社会と繋がる地域社会を中心として、主体的に認識を深めた。また、令和元年度に始まった「平和町プロジェクト」においては、住民が交流するオンラインイベントを地域商店街と協働するなど世代を超えた活動を継続して行っている。さらに、コロナ禍におけるフィールドワークの充実を図ることを視野に、11月に2日間の加賀現地学習を行い、フィールドワーク及び研究内容の中間報告会を行った。

グローバル課題研究では、昨年度に引き続き、生徒一人一人が自ら研究テーマを決め、グローバルな課題に関する研究に取り組んだ。合計12のゼミを形成し、ゼミごとに教員が助言・指導を行った。さらに、NJCとの協働研究を行うゼミにおいては、Zoom等を活用したテレカンファレンスを4回行った。

1、2年生の研究については、2月に県内外の高校生が参加する「探究成果発表会」を開催し、学校の枠を超えて生徒同士が自らの探究や学びを発表し合い、交流を行った。「探究成果発表会」には、社会人が助言者として参画し、専門的知見を含む多様な知見による学びを深めた。また1、2年生の研究成果についてはプラットフォームにまとめ、情報発信を行う。

「グローバル・キャリアパス」では、自己の特徴を認識し、高校3年間のさまざまな「学び」を踏まえて、自己の将来像を構想し、そこに到達するキャリアパスを考えることをねらいとし、①「学びの履歴書」に2年間の経験と学びをまとめ、②「学びの設計書」に自己の分析と、将来の目標設計を作成し、③オンラインキャリアパスの実施として、さまざまな学部の卒業生15人を

招き、8週にわたりオンラインによる講話を行った。生徒は、今までの学びをポートフォリオ的にまとめることによって、どのようなことを経験し、何ができるようになったかを自覚することができた。（【研究開発・実践】a,b,c,e,f）

②新たな科目の開発・実施

拠点校における新たな科目開発として、令和元年度に「国際教養 基礎」を導入し、年度ごとに見直しを行い実践している。この科目は、1年次から国際的な素養を育て、有効な海外交流に繋げるための新たな教科であり、専門研究を推し進める一方で押さえるべきスキルやコンピテンシー、マインドセットを教授するものである。令和2年度には、Zoom等を活用し、「帰納的論証」、「マインドセット」、「思考ツール」の習得を目的として授業を展開し、令和3年度には、「ポスター作製スキル」、「アンケート作成スキル」等の取得を目指す授業を展開した。（【研究開発・実践】a,c,f）

（2）－3 国内外の高校とのネットワークによる活動

①連携校等とのSDGs共同研究

カリキュラム・アドバイザーを中心に拠点校教員と協働し、SlackやZoom等を活用して、NJCと情報交換や意見交換を行い連携を更に強化するとともに、NJCと「Comprehensive Approach to Contemporary Social Problems」等をテーマに協働研究を展開した。また、令和3年度においては、国内から7校が参加し、231人の生徒による探究成果発表会を開催した。（【研究開発・実践】b）

（2）－4 海外研修/アジア高校生架け橋プロジェクトにおける海外高校生受入

①海外研修

令和3年度は、拠点校及び連携校において、各校が設定する課題研究に応じ、ディスカッション等で深めた知見を基に、高校生が適地においてフィールドワーク等を実施する海外研修を予定していたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、海外渡航を取りやめた。代替として、拠点校においては、Zoom等を活用し、県内外の高校や、様々な分野の専門家等が参画する探究成果発表会等をオンラインとパネルディスカッションの両方で開催し、学校の枠を超えて生徒同士が自らの探究や学びを語り合い、さらに様々な分野の専門家からの指摘を得ることを通して、多様な文化や知見を学んだ。また、国際会議での留学生との英語によるディスカッション等を通して交流を行った。（【研究開発・実践】d）

②架け橋プロジェクト受入

令和3年度は、アジア高校生架け橋プロジェクトについて、拠点校における本プロジェクトに係る留学生受入はなかった。令和4年度においては、拠点校において、国からの提案に応じ、「アジア高校生架け橋プロジェクト」での留学生を受け入れ、当該留学生に国内での多様な経験を積ませる活動を展開する。（【実施体制の整備】he, 【研究開発・実践】i）

（2）－6 高校生国際会議の開催

①留学生とのグローバル・ディスカッション

拠点校、連携校への留学生の派遣や国際会議におけるZoom等を活用したオンラインでの留学生との交流を行った。ポスター形式やワークショップ形式でのプレゼンテーションやディスカッションを英語で行うことにより、実践的な英語力の養成を図ることが可能となった。例えば、SGH事業から継続して、管理機関から連携校である金沢泉丘高等学校へ留学生の派遣を行っており、令和3年度は、令和2年度に引き続き、Zoom等を活用し英語によるディスカッションを行った。また、石川県立小松高等学校に留学生を派遣し、留学生へのインタビューやディスカッションを行うことにより、異文化理解の機会とした。（【財政等支援】a,b）

②国際会議の開催

管理機関主催で、拠点校を中心に国内外の高校生や社会人が参加し、国際会議をオンラインで開催した。企画は拠点校の生徒が中心となって企画し、参加者が英語によるディスカッションを行った。国内からは連携校の富山県立高岡高等学校、福井県立高志高等学校、石川県立小松高等学校だけではなく、長野県上田高等学校、福井県立藤島高等学校、宮城県仙台二華高等学校が参加し、海外からは、NJC の生徒が参加した。さらに、助言者として民間企業や教育機関等の社会人が参画するとともに、管理機関から留学生が参加し、ファシリテーションや助言を行なった。延べ 143 名が参加し、テーマとして「Zoom Out/In on the Universe to Find Your New Self」を掲げ、グローバルな社会事象について、北信越地方の高校生が社会人や海外の高校生との議論を通じて、自己とのつながりや問題の本質を明確化し、会議後の学びの深まりに繋げた。（【AL ネットワーク形成】e,f)

8 目標の進捗状況、成果、評価

・管理機関における進捗状況・成果

令和 3 年度においては、令和 2 年度までに構築したネットワークを基盤に、本事業における学年進行が完成することに鑑み、モデルカリキュラムを完成させるとともに、これまでの取組をさらに深化させ、取組・成果の国内外への発信や自走を見据えた取組を進めることを目指した。

この目標の達成に向け、管理機関にカリキュラム・アドバイザーを 2 名配置し、地域や海外との連携の強化を進めた結果、モデルとなる教育カリキュラムの開発・実践に至っている。ネットワークの形成に関しては、新たに、宮城県仙台二華高等学校の高校生国際会議、北海学園札幌高等学校などの探究成果発表会への参画により、北陸圏域を超えた地域ともネットワークの拡大・強化が進んでおり、関西の WWL 拠点である関西学院大学との WWL・SGH×探究甲子園との共催等、各地域にある WWL 拠点同士の連携体制も独自に構築し、継続的な運営に至っている。また、拠点校と連携校における小委員会を立ち上げ、より機動的に事業の企画・立案を行う体制も構築することができた。

高大接続にかかる AP については、すでに記載のとおり、これまで管理機関で実施している事業を引き続き行うとともに、令和 3 年度から学域等の科目等履修生の出願資格に「高等学校等に在学している者」を加え、高校生が大学教育を履修するための制度を全学で導入し、より高度な学びを希望する高校生が大学において学修できる環境を整備した。令和 3 年 10 月には、研究開発拠点校の生徒 5 名が、科目等履修生として金沢大学に入学し、1 科目を履修した。

これらのことから、令和 3 年度事業実施計画書をベースに順調に進捗しており、カリキュラムの開発に至ったが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、海外研修や地域での交流活動の実施が困難であった状況等を踏まえ、令和 4 年度も引き続き事業を継続し、海外研修での現地フィールドワークや地域住民との交流活動を実施し、これらの活動から得られる生徒の実体験に基づく多様な文化の理解や知見の醸成を行うこととしている。また、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、急速な DX の進展等をはじめとする社会の変化を踏まえ、アフターコロナを見据えた教育の深化に挑み続けるとともに、成果の検証を進める。

また、令和 3 年度は、学年進行の完了年度であるため、民間企業が開発したツール（AiGROW）を活用し、生徒の外向性や協調性等の気質と行動特性の診断も行った。また、卒業生の成長の課程を把握する仕組みを検討する中、株式会社リベルタス・コンサルティングが実施する卒業生を対象としたアンケートに協力し、その結果を踏まえ、さらなる取組の改良を検討することとしている。（8 目標の進捗状況、成果、評価 a~c、【実施体制の整備】e）

・拠点校における進捗状況・成果

拠点校においては、令和 3 年度は令和 2 年度からの新型コロナウイルス感染症の影響により、海外渡航の中止や行事等の開催方法の見直しを余儀なくされたが、管理機関に配置したカリキュラム・アドバイザーを主導的立場に立て、1 年次から 3 年次に通貫したカリキュラム開発を目指し、特に令和 3 年度は 3 年次におけるカリキュラム開発を中心に行った。（2）「グローバル・キャリアパス」において、自己の特徴を認識し、高校 3 年間のさまざまな「学び」を踏まえて、自

己の将来像を構想し、そこに到達するキャリアパスを考えることをねらいとし、①「学びの履歴書」に2年間の経験と学びをまとめ、②「学びの設計書」に自己の分析と、将来の目標設計を作成し、③オンラインキャリアパスの実施として、さまざまな分野の学士課程の卒業生15人を招き、8週にわたりオンラインによる講話を行った。生徒は、今までの学びをポートフォリオ的にまとめることによって、どのようなことを経験し、何ができるようになったかを自覚することができた。

・連携校における進捗状況・成果

連携校においても、拠点校と同様に、令和2年度に引き続き新型コロナウイルス感染症拡大により、海外渡航の中止や行事等の開催方法の見直しを余儀なくされたが、オンラインを活用する等、様々な工夫を凝らし、教育カリキュラムの開発や深化を進めることができた。例えば、金沢泉丘高等学校では、オンラインを活用した留学生との交流や、大学院生から研究指導を受ける機会も設けるに至っている。また、金沢二水高等学校や七尾高等学校等でも、オンラインを活用した留学生との交流の機会を設け、高志高等学校では企業との連携授業を実施した。また、連携校以外に国内外の高校生が参加する探究成果発表会や高校生国際会議への参加を通して、北陸圏域を超えて学びを深めることができた。

・評価について

令和3年度のWWL事業の達成状況に対する評価は本報告書を用い、運営指導委員会の指導を受けた。（【実施体制の整備】d）

9 次年度以降の課題及び改善点

・管理機関における課題及び改善点

令和3年度は、新型コロナウイルス感染症拡大により、新たな連携先の開拓が困難であったことを踏まえ、令和4年度は感染拡大の状況を注視しながらプラットフォーム等を活用し、自走によりネットワークの拡大・強化を図るとともに、事業を継続的に実施するための基盤の整備等を行うこととしたい。

・拠点校における課題及び改善点

これまで述べてきたように、新型コロナウイルス感染症拡大により、実施方法等の見直しが求められた中、「グローバル・キャリアパス」のカリキュラム開発等、明確な成果を上げている。しかし、令和2年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症拡大により、海外研修等が中止となり、オンライン等を活用し代替事業を展開したが、学生が現地での経験を通して得られる学びの機会を設けられなかったことは課題である。令和4年度は、新型コロナウイルス感染症拡大の状況を注視しながら、海外研修を実施し、探究活動のさらなる深化を進めるほか、管理機関からの財政支援や、基金の活用、さらにプラットフォームを活用したネットワークの強化・拡大等、自走により取組を進めていきたい。

第2章 令和3年度 WWL コンソーシアム構築支援事業拠点校・連携校における取組

●金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校における取組

1. SDGs を題材とした特色ある取り組みについて

(1) 1 年次 総合的な探究の時間

①年間指導計画

4～5 月	問題発見（大まかなテーマ設定）
6 月	予備調査・課題設定
7 月	第 1 回レポート提出
8 月	第 2 回レポート提出
9 月	本調査・中間発表（実習生によるファシリテーション）
10 月	本調査
11 月	異学年交流ポスターセッション
12 月～1 月	レポート作成・提出（分析・考察）
2 月	探究成果発表会（結果）

②今年度の改善点

昨年度の課題として、次の項目があげられる。

- ・一部生徒のモチベーションの低下
- ・探究の行き詰まり
- ・評価回数が増えたことによる教員の負担増
- ・異学年の交流が少ない
- ・一部の教員への負担の偏り

そこで、昨年度の課題をふまえ、次のように取り組みを変更した。

- ・グループ研究から個人研究へ
…モチベーションの低下やフリーライダー問題を避けるねらい
探究の「責任」を「自己」へ
- ・テーマ設定を重視
…興味・関心・進路に沿ったテーマに焦点化させることで、自己内省を生じさせる探究へ
- ・評価回数の削減
…ループバックはあくまでフィードバックのための形成的評価に使用することとし、レポートへのコメント返しを廃止 →教員の負担減
- ・教員の自由度 UP
…ゼミ運営の方法を各教員におまかせ
各教員の探究活動に対するノウハウの蓄積をねらう

③主なテーマ

マチュピチュの水源
アメリカザリガニの肥料化実験
早期英語教育による日本の未来
好印象で人間関係をより良くする秘密は？
金沢市の中小企業と性的マイノリティ研修の実態
金沢における近視の進行を抑える街づくりに関する研究

個人情報流出に繋がる画像を検出するシステムの開発
日本の産業を救う 1 × 2 × 3
手洗い教育の実情と子供の関心
障害者に関する社会の現状と問題点の解決への考察～3つの観点から～
日本の若者への睡眠促進

(2) 2年次 総合的な探究の時間（グローバル課題研究）

①形式

ゼミ形式をとり、生徒は個人でテーマを設定し研究を行った。
13人の教員が指導に当たった。

②海外連携校との協働研究

昨年度に引き続き、シンガポールNJC（ナショナルジュニアカレッジ）との協働研究を行った。19人の本校生徒が参加し、Zoomを使用して4回のオンラインミーティングを開催した。

協働研究のテーマは「Zoom Out/In on the Universe to Find Your New Self」（高校生国際会議と同じ）

1. Social Welfare under COVID-19／コロナ禍における福祉・衛生
2. Career Development／これからのキャリア形成
3. Cross-cultural Affairs／異文化共生
4. Comprehensive Approach to Contemporary Social Problems
／現代社会の課題に対する包括的アプローチ

③グローバル課題研究の主なテーマ

保水性・透水性舗装の温度低減効果に関する研究
砂漠化に対応した植物の在り方
日本のオンライン教育に関する研究
日本のオンライン授業について
駄菓子屋の持続的な経営は可能か
業績予想と実績の差異に対する株価反応
ヴィーガン・ベジタリアンが受け入れられる社会に向けて
金沢市が目指すべきバスシステムの姿とは
インド農村地域における落雷被害の改善
金沢におけるバス路線網再編に関する考察ー野々市円光寺線及び千代野線の事例よりー
防風林についての研究
モバイルオーダー制校内販売の導入に関する研究～校内販売がもつ地域活性化への可能性～
開校記念祭電子チケットシステム(QROS)の改良に向けた研究
ヘアドネーションに関する研究

(3) 3年次 総合的な探究の時間（グローバルキャリアパス）

①オンラインキャリアパス

- ・ねらい
大学の学部で何を学べるか？を大学3～4年生の先輩に聞く機会を提供する。
社会で活躍する様々な職種の先輩と交流する機会を提供する。
- ・内容と方法
ICTを利用した遠隔授業を講師にお願いする（Zoom等を利用）。
授業時間は1コマ（50分）。例）30分の話＋20分の質疑応答。
- ・講師について
多様な学部・学科の卒業生に声をかける
講師には授業の趣旨を理解してもらう
- ・実施計画

	月 日	講演者の学部・学科，講演内容		
第1回	4/15(木)	オリエンテーション		
第2回	4/22(木)	建築学部，都市計画など	経済学部	
第3回	5/6(木)	法学部	大学中退→起業	
第4回	5/20(木)	経済学部	薬学部	
第5回	5/27(木)	工学部	国際社会学部	
第6回	6/10(木)	医学部	外国語学部	理工学部電子工学科
第7回	6/17(木)	医学部看護学科	理学部生物科学科	
第8回	6/24(木)	商学部	理学部宇宙物理科	

②学びの履歴書・設計書作成

(i)ねらい

自己の特徴を認識し，高校3年間のさまざまな「学び」を踏まえて，自己の将来像を構想し，そこに到達するキャリアパスを考える。

- (ア) 将来，自己の能力を生かして，社会・国家・世界に貢献できる自己の将来像を構想する。
 (イ) 自己の目標を明確にすることにより学習意欲を高める。
 (ウ) 自己の将来像を実現できるよう，種々の制度に対応できる準備を行う。

(ii)「学びの履歴書」

(ア) 内容

2年間の経験と学び（「総合的な学習の時間」，「教科」，生徒会・行事・部活動・特別授業，各種コンクール・ボランティア・外部セミナー・留学体験・地域貢献など自主的活動での経験と学び，その他の経験）についてまとめる。特に，e-ポートフォリオとして，まとめてきた文章を利用してまとめるとよい。

自己分析：2年間の経験と学びを踏まえて，自己の能力・資質について考察する。

(イ) 評価

- ・自己をどれだけ分析できているか
- ・具体的な経験に基づいているか
- ・「自分がどんな成長をしたか」について明らかにできているか

(iii)「学びの設計書」

(ア) 内容

- ・自己の将来像
社会・世界からの要請（現在・将来）
自己の貢献できること（在り方・生き方，職業）

・学びの設計書

大学等での学びの設計書

大学生活において何を目標にし、何をどこ（大学・学部）でどのように学びたいか

留学 社会体験も含めて

将来にわたる学びの設計書

（大学卒業後、大学で学んだことをどのように活かしたいか）

(イ) 評価

- ・「学びの履歴書」と関連させられているか
- ・社会・世界からの要請をどれだけ認識できているか
- ・自己の在り方・生き方を主体的・積極的に考えているか
- ・大学・学部について広く・深く調査できているか
- ・大学卒業後の学びの展望が示されているか

③成果と課題

生徒は、今までの学びをポートフォリオ的にまとめることによって、どのようなことを経験し、何ができるようになったかを自覚することができた。

オンラインキャリアパスは講師の選定、日程調整に苦勞した。

(4) 「高校生探究成果発表会」の開催

①目的

- ・石川県内外の高校生がこれまで取り組んできた探究成果を発表する機会とする。
- ・専門家や社会人からの指摘を得ることで、専門的知見を得たり視野を広げたりする機会とする。
- ・学校の枠を超えて生徒同士が自らの探究や学びを発表し合い、同世代からの刺激を得て、今後の生徒の探究活動の一助になるような機会とする。

②期日 2022年2月19日（土）

③方法 オンライン発表（Zoomを使用）とポスターセッション

④発表数

オンライン発表：38 ポスターセッション：155

⑤オンライン発表の分科会と助言者

分科会	助言者（敬称略）
① 自然・環境問題	笠間彩（金沢市役所）
② 教育	末廣優太（三谷産業・ミミミラボ）
③ 政治・経済	山田知佳（日本政策金融公庫）
④ 文化	高橋栄一（金沢学院大学）
⑤ 防災・社会インフラ	小倉拓郎（筑波大学）
⑥ サイエンス	杉森公一（北陸大学）
⑦ 医療・健康	平尾敦（金沢大学がん進展制御研究所）

⑥参加校

北海学園札幌高等学校 宮城県仙台二華高等学校 長野県上田高等学校

長野県長野高等学校 獨協埼玉高等学校 石川県立大聖寺高等学校

福井県立若狭高等学校 金沢大学附属高等学校

※ポスターセッションについては、近隣の高等学校も参加する予定であったが、新型コロナウイルスの流行に伴い、やむを得ず本校生徒のみの発表となった。

2. 先導的なカリキュラム開発について

(1) 国際教養 基礎

①目的・ねらい

学校設定科目「国際教養 基礎」の目的は、グローバル人材の素地を築くことである。

WWL コンソーシアム構築支援事業拠点校の申請にあたり、SGH 事業で培った取り組みをどう活用し、発展させるべきかが課題となった。全国的な課題である世代交代の波に、本校も多分に漏れず直面している。WWL 事業として、まったく新しい価値創造が求められる一方で、遺産の継承も責務である。教員数 22 名で学校を運営し、一任制で展開している科目も多い現状で、更なる研究開発を強ければ、授業を圧迫し、生徒の不利益になりかねず、また、各教科科目が 5 年間取り組んだ教科 SGH 化が過去の遺物と化してしまう可能性も高かった。教科のカリキュラムに負担をかけずに、研究成果を実践し、また、新たに先進的な取り組みを実験する機会の必要性が高まっていた。時を同じくして、総合的な探究の時間において、アカデミックな個人研究カリキュラムが始まり、生徒の専門性が高まる一方で、研究対象の分野以外に対する知識の乏しさを懸念する声も高まった。

こうした背景を受けて、専門研究を推し進める一方で押さえるべきスキルやコンピテンシー、マインドセットを教授し、教科の枠を超えて、各教員の強みを生かすことのできる授業として「国際教養 基礎」が設定された。

探究的な学びには、「実践」と「理論」の往還が必要だと考え、「国際教養 基礎」では生徒が「体験的」に理論を学ぶことを目標としている。ここでの「理論的アプローチ」とは、探究活動を深めていくための研究手法（スキル）や、習得したスキルを必要に応じて選択し用いるために必要な資質・能力（コンピテンシー）、課題に対して当事者意識を持つなどの意識改革（マインドセット）のことを指している。「国際教養 基礎」で培った資質・能力（コンピテンシー）は「総合的な探究の時間」だけでなく、各教科科目、学校行事、校外活動など、様々な場面で発揮され、「理論」と「実践」の融合がスパイラル的に展開されていくことを期待している。

②方法

教育課程では 1 年次に 1 単位。実際には 1 年次の総合的な探究の時間（1 単位）と合わせて金曜日の 5、6 限を使って弾力的に運用している。例えば、ある週は総合の時間が 2 時間、またある週は国際教養の時間というように行っている。

③実施形態

今年度も、昨年度に続き新型コロナウイルス感染防止対策のため、授業を 1 学年(120 人)一斉に大教室で行うことができなかった。そこで、クラスごとに 3 クラスそれぞれで行うか、Zoom を活用して各クラスに一斉配信する授業のどちらかの方式をとった。

④主な実施授業

実施日	授業タイトル	授業方式	目的
4/23	NASA ゲーム	リモート 一斉	協働マネジメント
5/21	インテリジェント・デザイン 論は科学か？	リモート 一斉	先行研究検索スキル マインドセット／リテラシー
6/11	How to be persuasive	リモート 一斉	テーマ設定 帰納的論証
7/20	Global Leader Crosstalk	リモート 一斉	グローバルマインドセット
9/17	都道府県地図を作ろう	各クラス	マインドセット
10/28 10/29	話し方講座	各クラス	プレゼンテーション作製スキル
11/5	理想のポスター	リモート 一斉	ポスター作製スキル
1/14	あんけ〜と	リモート 一斉	行動経済学／統計学 アンケート作製スキル
2/4	factfulness 1 + 2	各クラス	マインドセット／クリティカルシンキング
3/11	東日本大震災	各クラス	マインドセット

3. 高校生国際会議について

(1) 第1回 令和3年3月20日(土) オンライン開催

※SGH「北信越フォーラム」を発展的に継承

- ・テーマ「パンデミックの時代に私たちはどう生きるか」
分科会A：地球温暖化と異常気象・災害
分科会B：科学技術のこれから
分科会C：コロナ禍で考える私たちの学び
分科会D：高校生ソーシャル・イノベーション
- ・参加者：国内連携校+北信越3校+エジプトやアメリカなどの海外在住者（述べ参加人数66人）
- ・助言者：大学教授，行政職員，起業家，民間企業社会人

(2) 第2回 令和3年8月6日(金) オンライン開催

- ・テーマ「Zoom Out/In on the Universe to Find Your New Self」
分科会A: Social Welfare under COVID-19／コロナ禍における福祉・衛生
分科会B: Career Development／これからのキャリア形成
分科会C: Cross-cultural Affairs／異文化共生
分科会D: Comprehensive Approach to Contemporary Social Problems
／現代社会の課題に対する包括的アプローチ
- ・参加者：
国内連携校：石川県立小松高等学校，富山県立高岡高等学校，福井県立高志高等学校
北信越の高校：長野県上田高等学校，福井県立藤島高等学校
その他：宮城県仙台二華高等学校
海外：シンガポールN J C
[述べ参加人数143名（午前24名，午後119名）]
・英語ファシリテーター：金沢大学留学生

(3) 第1回からの変更点

「教員主催」から「生徒主体」へ
「日英併用」から“All English”へ
「プロジェクト立上げ／ブレインストーミング」から「探究の中間発表／ディスカッション」へ

4. 大学の科目履修について

①概要

- ・令和3年度に 科目等履修生の出願資格を「高等学校等に在学している者」へ拡大

②状況

- ・面接審査等を経て附属高校から5名入学（1年2名，2年3名）
- ・科目名「細胞の自己制御と化学反応」（第4Q）
- ・担当教員：西山宣昭（金沢大学学術メディア創成センター）

5. ポストWWL

(1) 総合的な探究の時間の取り組みの変更

①現在の総合的な探究の時間の問題点

- ・探究ボトム層の生徒への対応
- ・異学年の交流の少なさ
- ・教員の「探究観」の違い
- ・主担当教員の負担過多

②新課程における総合的な探究の時間の仕組み

- ・異学年合同ゼミへの移行
- ・教員の強み・個性を活かした持続可能なゼミ運営体制への移行
- ・学校目標に沿った「育成したい資質・能力」をもとにした評価システムの構築
質的評価ルーブリックを，学校目標に必要な資質・能力を細分化して，その項目について開発する。
現在，生徒も交えて，ICE ルーブリックの作成にとりかかっている。



●石川県立金沢泉丘高等学校における取組

① SDGs を題材とした特色ある取組について

- ・学校設定科目「SG 思考基礎」におけるグローバル課題の研究
文理融合を掲げ、公民と理科のティームティーチングにより、社会課題を題材に生徒に考察させる授業を実施。1 学期には、SDGs 項目 7 のエネルギー問題をテーマとして、実際に燃料電池に関する実験をデザインさせ、その課題を考察させるとともに、科学的なリテラシーを学ばせた。2 学期以降は、SDGs 項目 14 の海洋ごみ問題をテーマに地元の海岸への探究フィールドワークを実施した。さらに、事後活動としてその解決策をグループごとに研究させ、外部に対するインタビューや提案を行うなどの研究過程も踏まえて発表させる授業を実施した。
- ・「総合的な探究の時間」における課題研究
1 年普通科の課題研究では、デザイン思考の手法を使って「身近な問題の解決」をテーマとしたグループ研究を実施した。
2 年普通コース文型と理型の一部では、金沢市が取り組む「金沢ミライシナリオ」を題材として、SDGs 達成のためにどのような問題解決が考えられるかを研究し、実際に金沢市役所職員や大学教授等に対して発表を行った。
2 年 SG コースでは、SDGs を切り口としたグローバル課題の解決を研究テーマとし、令和 2 年度からはプロジェクト型学習（PBL）という形で、実践を前提とした研究に挑戦している。全 8 グループがそれぞれに実践を伴った活動にチャレンジしている。フェアトレード活動の普及に取り組むグループが金沢市議会議員の勉強会でプレゼンテーションを行う等、実際に社会を動かそうとする主体的な取り組みも生まれている。
- ・1 年「探究フィールドワーク」の実践
昨年度に引き続き、10 月に 1 年生全員を対象に「探究フィールドワーク」を実施。英語の動画や文章で事前学習をした「海洋プラスチックごみ」の問題について、実際に地元能美市の海岸に行き、ボランティア清掃を兼ねてコドラート法によるマイクロプラスチックの採集を行い、SG 思考基礎で観察と分析、その解決策を発表させるといった教科横断型の授業を展開した。さらに、事後活動として、この問題に取り組む企業の方々を招き「パネルディスカッション」を行い、SDGs に取り組む必要性も学んだ。今後、さらに多くの科目を巻き込みながら発展させることで、新たな教科横断的で実証的な学びのあり方を探っていきたいと考えている。

② ①以外の先導的なカリキュラム開発について

- ・高大連携
金沢大学、東京外国語大学の留学生にオンラインで参加していただき、3 年 SG コースの課題研究成果発表会を実施した。また、2 年 SG コース生に対しては、京都大学総合生存学館（思修館）の大学院生 8 名から研究指導を受ける機会を二度設けた。初回はオンライン、二回目は実際に京都まで足を運び対面で行った。また、2 月の研究発表会にもこれらの大学院生にオンラインで発表の様子を視聴してもらい、事後に研究成果に対する講評をいただいた。
- ・実践的な英語力の養成
学校設定科目「グローバル・イングリッシュ」等を通して、実践的でコミュニケーションな英語の授業に取り組んでいる。題材もグローバル課題を扱うことで、より社会課題への意識を高める役割も担っている。
また、1 年生全員を対象にオンラインで国内の外国人留学生（金沢大学、東京外国語大学）を相手に英語で互いの文化の紹介を行う「Discussion Day」を 2 月に実施した。
- ・グローバルリーダー養成講座の開催
希望者を対象とした様々な特別講義やワークショップを実施することで、グローバルリーダーを志す生徒を増やす働きかけを行っている。令和 3 年度は、プリンストン大学生とのオンライン交流会、本校の SG コース卒業生による「『探究』し続ける卒業生が語る会」、ワークショップ「世界とあなたをつなぐフェアトレード」、JICA による「青年海外協力隊 O B によるアフリカ無電化地域の話」等を実施した。
- ・学校を越えた学びの交流の促進

立命館宇治中・高校のWWL事業「FOCUS」に2年SGコースから6名がオンラインで参加し、全国の高校生と探究活動をテーマとして交流した。また、3月には「全国高校生マイプロジェクトアワード」と関西学院大主催「探究甲子園」に2年SGコース生が参加する。

また、イオンワンパーセントクラブ主催「アジアユースリーダーズ2021」に1年生2名が参加し、アジア8か国の高校生たちと3日間英語でフードロス問題の解決に取り組んだ。

・全校的な探究スキルの開発と共有のための行事「探究の日」の継続

昨年度に引き続き、3月に1年生・2年生の課題研究の発表を行うだけではなく、課題研究の経験をもとにしたコツや意義を2年生から1年生に継承・交流するプログラムとして「探究の日」を予定している。生徒間における探究の方法等の共有のみならず、教員の指導力向上もねらいとしている。

③ その他（達成状況、課題等）

・コロナ禍への対応から見える可能性と限界

海外研修や課題研究における積極的なフィールドワーク等、これまで構築してきた様々なプログラムは、今年度もコロナ禍の影響で中止または大幅に縮小せざるを得なくなった。その中で、現地に足を運び対面で学ぶことがいかに価値のあることなのかを再確認させられた。生徒の学びを、これまでの生徒の学びと比較したときに、明らかにその厚みが足りていないことはスタッフ全員が感じているところである。とはいえ、たとえ従来と比べて学びが減ることになったとしても、学ぶ機会自体をなくすわけにはゆかず、それをいかに保証するのかは考え続けていく必要がある。そのためのオンライン形式による方法に関しては、昨年度の経験をふまえて教員間でより広く共有されるようになってきており、よりスムーズな運営を行うことができた。

●石川県立金沢二水高等学校における取組

① SDGs を題材とした特色ある取組について

(1) 模擬裁判実習 2年生人文科学コース（40名）生徒対象

総合的な探究の時間に行う課題探究活動の一端として、4月から6月上旬まで10時間をかけて、金沢弁護士会の弁護士より指導を受けながら学ぶ。「平和と公正をすべての人に」の目標達成のため、裁判に関わる基礎知識を学ぶとともに、実習を通して公正さとは何かを考察する機会とする。複数の弁護士を学校に招いての学習と模擬裁判の実演実習授業を行う。

<ねらい>

- ・資料を読み込み、証人と被告双方の主張とその根拠となる証拠を収集する。双方の立場での主張の整合性と問題点を分析する。【課題の設定】【情報の収集】
- ・論告と弁論をまとめ上げるため、多くの事実を整理分析しながら自分の考えをまとめ、信用性の高い発表を作り上げていく。【整理分析】【まとめ】
- ・実際の法廷の場で、相手に伝わるように工夫しながら表現する力を身につける。【表現】

<日時と内容>

- | | | |
|--------|----------|---|
| 第1・2時 | 4月22日（木） | ・刑事裁判の基本原則と法曹三者の役割を学ぶ
・刑事裁判手続きの流れの概説
・模擬裁判選手権の教材の読解 |
| 第3・4時 | 5月6日（木） | ・ブレインストーミング：積極事実消極事実の抽出
供述の信用性の検討 |
| | | ・論告と弁論の検討① |
| 第5・6時 | 6月10日（木） | ・論告と弁論の検討②③ |
| 第7時 | 6月17日（木） | ・論告と弁論の検討④ |
| 第8～10時 | 6月24日（木） | 模擬裁判実演実習 |

<学習効果>

- ・刑事裁判に関して弁護士から直接学ぶ機会の貴重さを実感できた。
- ・裁判を模した教材を利用して、読解力と分析力、発表の構成力を学ぶことができた。
- ・模擬裁判を実演することで、知識と理解を実践的に活用する機会を得た。

(2) グローバルソリューション 2年生人文科学コース（40名）生徒対象

課題探究活動を行う総合的な探究の時間を「グローバルソリューション」という科目名とし、SDGsに掲げられた目標の解決に資する課題の設定や考察を行う。ただし、規模の大きすぎるテーマでは高校生の力での解決は困難なことから、学校生活や地域社会の中で取り組める課題を取り上げるようにしている。今年度は、コロナ禍のためフィールドワークを行うことができず、探究テーマも限られたものになった。

(3) グローバルゼミ 2年生人文科学コース（40名）生徒対象

上記グローバルソリューションの一環として、11月17日（水）午後、金沢大学に学ぶ留学生8名との交流機会を持った。課題探究で取り組むテーマについて意見交換をしながら、交流と考察を深めた。例年は、講義科目「日本の教育」の受講学生の派遣を国際機構の斉木麻利子教授に依頼し、多数来校していただいているが、今年度は6名のみ来校し対面型で交流ができたが、2名はまだ来日できておらずオンラインでの交流となった。本校生徒の修学旅行先は例年海外であるが、今年度も国内へと行き先が変更となり、この行事が唯一の国際交流の機会となった。大学生、そして外国人としての視点から多くの意見と助言をもらうことで、視野が広がり、課題探究のテーマに対して複眼的な見方が出来るようになった。

●石川県立小松高等学校における取組

② 先導的なカリキュラム開発について

1. 1年生「課題探究基礎」【実施時期：4月～3月】

4月から9月まではクラス単位でディベートを実施した。学年団が担当した。文理のクラス分けの作業に入る10月以降は文系予定者に対して「基礎ゼミ」と称する課題研究を行った。複数のクラスの生徒でグループを作り、文系科目の授業担当者が複数グループの指導に当たった。

2. 2年生「人文科学コース課題研究Ⅰ」【実施時期：4月～3月】

人文科学コース40名を9つのグループに分けて、英語、国語、地歴の教員8名が指導に当たった。週に2時間設定して、大学での学びや、現代的な問題の解決策を求めて研究した。

3. 2年生「課題探究Ⅰ」【実施時期：4月～3月】

2年生普通科文系2クラスの生徒を対象に、英語、国語、地歴の教員6名が指導に当たった。週に1時間設定した。人文科学コース課題研究Ⅰに準じて、生徒の主体性が発揮しやすいように配慮した。

4. 金沢大学の外国人留学生との交流会【実施時期：9月】

令和3年9月28日（火）12：50～15：50

開講式 留学生紹介、日程確認など

各ブースへ移動

Session 1 文化交流（9グループ）

Session 2 小松高校生によるプレゼンテーション（9グループ）

Session 3 文化交流（9グループ）

Session 4 小松高校生によるプレゼンテーション（9グループ）

Session 5 文化交流（9グループ）

Session 6 小松高校生によるプレゼンテーション（9グループ）

閉講式 留学生からのメッセージ

生徒は課題研究の班で9グループを編成。

各グループに1～2名の留学生が加わる。

◆各 Session の詳細

□Session 1, 3, 5 文化交流（30分）

留学生による自己紹介、生徒の自己紹介、生徒から留学生への質問。

何故留学しようとしたのか、金沢大学での研究内容、将来の計画などについて質問しました。また異文化の中で生じる問題点や、それをどう乗り越えたのかについても、質問しました。

□Session 2, 4, 6 プレゼン（10分）

それぞれの班の課題研究の概要を英語で説明しました。写真や画像、表やグラフなどを併用しました。その後、留学生からの質問に答えました。

●石川県立七尾高等学校における取組

① SDGs を題材とした特色ある取組について

- 学校設定科目「論述錬磨」に係る講義
 1. ジェンダー学専攻の研究者を講師に招き、思想、文化、メディアといった観点から社会的事象やその課題について学んだ。
 2. 生態学専攻の研究者を講師に招き、生物多様性や里山里海保全といった観点から社会的事象やその課題について学んだ。
- 学校設定科目「B探究」に係る講演
 1. 2030SDGs 公認ファシリテーターを講師に招き、国連が定める SDGs についての講演やカードを使用したワークショップを体験した。
 2. 旅行会社より講師を招き、旅行商品開発の事例を基に実践的な地域資源の活用の方策やその着眼点について講義を受けた。
 3. 起業家や起業支援団体から講師を招き、地域の可能性を深掘する自身の取組や他の事例について講義を受けた。
 4. 航空産業関係者を講師として招き、航空産業が直面している課題や対応について講義を受け、現実に応じた課題研究になるよう改善した。
 5. JICA 北陸所属の海外研修員や JICA 海外協力隊経験者を招き、SDGs へ取組む具体的事例や国際協力活動、異文化理解について講義を受け、協議した。
- 全国大会規模の探究発表会へ参加
(2022 年 3 月予定) WWL・SGH×探究甲子園に参加し、SDGs に関する発表や探究活動に関する先進的、具体的取り組みについて学ぶ。

② ①以外の先導的なカリキュラム開発について

- 学校設定科目「スピークアウト」における留学生との交流
 1. 留学生とのオンラインでのインタビューを通して、石川県や能登のインバウンド発展をテーマとした課題研究を深めるための情報を収集した。
 2. 留学生とのオンラインでのプレゼンテーションや質疑応答を通して、課題研究の内容を改善した。
 3. 留学生とのオンラインでのディスカッションを通して、SDGs の 17 ある目標の 1 つを達成するための方策を探る。
- 学校設定科目「B探究Ⅰ」に係る講演会
 1. ディベート中の論点の整理法や客観的資料の使い方など基礎的な探究スキルを専門家から学んだ。また、練習を重ねた段階でディベートの試合を行い、改善のための指導を専門家から受けた。
 2. 観光研究学や地域政策研究において実際に地域経済分析システムを活用している研究者を講師に招き、その活用事例について講義を受けた。
- 「能登の里山里海」特別講座
世界農業遺産活用実行委員会より講師を招き、里山里海を活かした地方創生の取組について講義を受けた。
- スーパーグローバル大学志望者育成のための講演会
スーパーグローバル大学の教官を講師として招き、高等教育の方向性や具体的な取り組みについて講義を受けた。

③ その他（達成状況、課題等）

達成状況

- 各行事後のアンケートより、約 85%以上の参加生徒は NSH 事業に係る行事を肯定的に評価し、中にはある行事を契機として自身の進路決定をした生徒もいる。

- WWL のお力添えで、講座目的に合った講師を七尾高校へ派遣していただけており、より良い講演会の開催が可能となった。

課題

高校生国際会議などの WWL 関連のイベントを、本校が有効に学習の場として生徒へ提示できなかったこと。

●富山県立高岡高等学校における取組

① SDGs を題材とした特色ある取組について

- ・高岡市をはじめ、地域企業と共同で地域課題の解決を図った。（普通科2年生）
- ・地域と連携し、「自主的な参加を促す海洋保全活動の特徴」について研究した。（探究科学科2年）

② ①以外の先導的なカリキュラム開発について

- ・昨年に引き続き、新型コロナウイルス感染症のため、計画予定だった2年生を対象とした海外研修は中止せざるを得なかった。
- ・他校の生徒、大学生、大学院生と交流を持ち、都市計画や環境について交流した。（高山 GSF）
- ・北東アジア青少年環境活動リーダー育成事業に参加し、海外の高校生たちと交流した。

③ その他（達成状況、課題等）

- ・今年度普通科2年生の総合的な探究の時間において、高岡市や地域企業との協働活動を行った。企業等から提案された課題を高校生の視点から問題解決を考える活動であった。生徒たちは地元企業が抱える問題やその問題の解決方法を考えることを通して広く視野を広めることができたと思う。

●福井県立高志高等学校における取組

1. SDGs を題材とした特色ある取組について

9月より福井県が主催する「ふくいSDGsパートナー」に登録し、登録企業や団体と連携しながら、主に課題研究や生徒会活動を通して、SDGs達成にむけて様々な活動を行っている。

(1) 課題研究について

課題研究に関する学校設定科目である「K o A - S (グローバル)」では、本校2年生グローバル選択生徒78名が、「SDGs達成プロジェクト！～高志高生が福井県の企業を動かして世界を変えよう～」をテーマに、福井大学・福井経済同友会・地元企業と連携して、環太平洋諸国の社会問題の解決、生活の向上のための製品開発や企画提案を行っている。

<主な取組み>

- ・麦ストローを地元企業と共同して商品改良
- ・マイボトル促進運動を福井県へ提案
- ・フェアトレード商品の販促イベントを地元企業と共同開催
- ・フェアトレードをテーマにしたラジオ番組を地元企業と制作
- ・フードロス削減の取組みを地元企業と共同で実施
- ・地元企業の鯖缶をアメリカの交流校と共同して商品改良

(2) 大学・企業・団体との連携

① 福井大学地域創生推進本部との連携

上記機関からは平成27年度から課題研究に関する指導・助言等を頂いており、専門的な見地からオリエンテーションや仮説の設定、中間報告会、最終報告会など様々な面で指導・助言を頂いた。特に福井大学地域創生推進本部の竹本拓治教授には、企画段階から様々な助言を頂いており、本校の課題研究がより充実したものとなっている。

② 福井経済同友会との連携

福井経済同友会からは1年次での外部講師連携授業において、講師を紹介して頂いており、これまでに主にグローバル展開している企業と連携授業を実施している。2年次での課題研究においても、協力企業の紹介をして頂いている。

(3) 人的交流

東・東南アジアの様々な国の高校生と問題解決力や自発的な行動力を高めるとともに、グローバルな感覚を養い、価値観の多様性を学ぶことを目的として、今年度はイオン1%クラブが主催する「アジアユースリーダーズ2021」に参加した。今年度は「食品ロス削減の視点で考える食の未来 づくり」をテーマに議論を行った。

(4) 生徒会活動

生徒会が主体となって「コンタクトレンズケース回収運動」を行った。

2. 1以外の先導的なカリキュラム開発について

(1) 海外の高校等との交流について

本校は、平成27年度よりカセサート大学附属マルチリンガルプログラム校と交流協定を結んでおり、今年度も本校を訪問する予定であったが、新型コロナウイルス感染症の影響により中止となった。

(2) 英語における学校設定科目について

探究学習を英語運用面から支援するため設定した学校設定科目は以下のとおりである。

記号	科目名	単位数					備考
		1年	2年文系	2年理系	3年文系	3年理系	
ア	英語活用B E (Basic Expression)	3					
イ	英語活用A E (Advanced Expression)		3	2			AE・RP・DD より1科目 選択
ウ	英語活用R P (Research & Presentation)		3	2			
エ	英語活用D D (Debate & Discussion)		3	2			
オ	英語表現C W (Change the World)				2	2	C W・C W+より 1科目選択
カ	英語表現C W (Change the World) +				2	2	

3. その他（達成状況、課題等）

(1) 達成状況について

本校では「グローバルな視野で新しい分野に挑戦し、地域社会にイノベーションを起こす人」を育成する人材像として掲げ、以下の資質・能力を生徒に身につけさせようとしている。

【資質】①社会問題の解決に向けて、異なる立場の人たちとの衝突や混乱を乗り越え、協働して挑み続ける意識や行動。

②自国文化や異文化を理解した上で、新しい価値や文化を作り上げて、社会の発展や平和に貢献しようとする意識や行動。

【能力】①論理的思考力、批判的思考力、問題解決能力。

②創造力、協同・協調力、傾聴力、情報活用能力。

本校で独自に実施している、課題解決に関わる力等の伸長を自己評価する「高志高校生徒アセスメント」(KSA)では、「東南アジア諸国と日本との関わりについて知りたい」という項目で、昨年度と比較して上位層の減少が見られた。原因として海外フィールドワークを中止したことが考えられる。

(2) 今後の課題について

新型コロナウイルスの感染拡大が収束しない中で、来年度の海外フィールドワークの中止も決定している。そのため、代替の国内フィールドワークの実施や海外の高校とのオンラインでの交流など、生徒が国内外の人々との交流を通して、チームで協力して社会問題の解決に取り組む活動を確保したい。